

漢詩入門

佐藤保『詳講漢詩入門』（筑摩書房、二〇一九年）

後藤淳一編著『はじめての漢詩作り入門』（大修館書店、二〇二三年）





目次

一

漢詩の歴史

二

漢詩の構造

三

漢詩のコツ

漢詩の歴史

一

詩經・楚辭

樂府

南北朝

隋・唐

宋

元・明・清

漢詩の歴史

詩 経

春秋時代に孔子が編纂したと伝えられる。

中国現存最古の詩集。

四字句を主体とする素朴なリズムと人々の生活に根ざした現実味溢れる内容は、後世の詩歌に大きな影響を与え、中国詩の実質的な始まりと言って良い。

国風・關雎（抜粋）

關關雎鳩 関関たる雎鳩は

在河之洲 河の洲に在り

窈窕淑女 窈窕たる淑女は

君子好逑 君子の好逑

カンカンと鳴き交わすミサゴは、

黄河の中洲に仲むつまじい。

たおやかな良きむすめは、

すぐれたおのこの良きつれあい。



漢詩の歴史

楚 辞

戦国末期の江南楚の国の民謡にもとづいて作った作品。

屈原（前343-前277）

政争に敗れて中央から追われたあと、楚の山野を放浪しながら国の政治を憂え、我が身の不遇を訴える情感を切々と歌いあげた。同時にまた、祖国の楚の国の美しい自然を見事に描写したことでも知られている。

楚 辞（抜粋）

汨餘若將不及兮

汨として余は將に及ばざらん

とするが若く

恐年歲之不吾與

年歳の吾と与にせざるを恐る

朝搴阰之木兰兮

朝には阰の木蘭を搴り

夕攬洲之宿莽

夕には洲の宿莽を攬る

速やかに過ぎ行く時に、遅れはせぬかと焦り、年月がわたしを待ってくれないのを恐れて、朝には岡の上の木蘭の花をつみとり、夕べには川の中洲の宿莽を取って身に帯びた。



漢詩の歴史

楽府

漢代に入ると、民間でうたう歌謡を集めて整理し、そして演奏するために、音楽の役所である楽府が設置された。

のちに楽府で集められたような歌謡の作品を、役所の名に因んで「楽府」と呼ぶようになった。

楽府歌謡から、やがて音楽の伴奏を伴わずにただ口で吟誦されるだけの一句五言の定型詩の形式が成立し、漢代の後半、すなわち漢代以降、楽府歌謡と併存することになった。

古詩十九首・其の二（拔粹）

青青河畔草

青青たる河畔の草

綿綿思遠道

綿々として遠道を思う

遠道不可思

遠道 思うべからず

宿昔夢見之

宿昔 夢にこれを見る

春が来て、河べりに青々と草が生い茂る。一面の草を見ながら、はるか遠くの長城にいるわが夫を思いやる。遠い夫をいくら思ったところでどうにもならないが、昨夜、夫の夢を見た。



漢詩の歴史

魏 晉 南北朝

ほとんどすべて五言詩と樂府の作品である。

当時の一流の知識人たちが五言詩と樂府の創作に参加しはじめ、中国古典詩のいわば成長期に入る。彼らは詩經・楚辭・樂府と流れてきた詩の伝統を踏まえながら、詩に新たな工夫と洗練を加え、中国の詩を彼ら知識人の文学形式の一つに育てあげた。

建安七子：孔融、陳琳、王粲、阮瑀、應瑒、劉楨

三曹：曹操、曹丕、曹植

歸園田居

陶淵明

（拔粹）

羈鳥戀舊林

羈鳥は旧林を恋い

池魚思故淵

池魚は故淵を思う

開荒南野際

荒を南野の際に開かんと

守拙歸園田

拙を守って園田に帰る

籠につながれ鳥は古い巢の林を
恋い慕い、池の魚はもと棲んで
いた淵を懐かしむ。わたしも同
様に、南の野原で荒れ地を開墾
しようと、世渡り下手の我が分
を守って、田園の家に帰ってき
た。



漢詩の歴史

隋 唐 (概観)

隋：一部に北朝詩の素朴な力強さを残しながらも、主流は依然として南朝風の華麗な、修辭的、耽美的な詩風が受け継がれた。
唐；多くの優れた詩人が現れて、盛世を謳歌し、平穩な生活を楽しみ、また社会矛盾をあげて改革を訴えるなど、多様な題材に多彩な才能を発揮して、いわゆる「詩の時代」が出現した。
中国の詩が一つの頂点に到達した時期である。

前半は安定した政治により政治や社会經濟が飛躍的に発展し、その結果、都の長安を中心に學術・文化が一斉に開花した時期であるが、後半は一転して政治的不安と社会矛盾が激化した混乱の時期であった。

初唐	618-711年	唐の建国から玄宗の登場まで
盛唐	712-765年	玄宗の治世を中心に王維・李白等の死の前後まで
中唐	766-835年	代宗の大暦年間から文宗の大和年間の終わりまで
晩唐	836-907年	文宗の開成年間から唐の滅亡まで

漢詩の歴史

初唐 (618-711)

初唐の約一〇〇年は、概括的に言えば、まだ王侯貴族や高官たちによる南朝風の詩が盛行したじきであるが、詩の形式面においては、齊・梁依頼多くの人々が努力を重ねてきた韻律的な工夫がようやく定着して、新しい近体詩の形式が一般化していった時期である。いわば、真の意味での唐詩の出現の準備期間であつたといえよう。

燕昭王 陳子昂（抜粋）

南登碣石館 南のかた碣石館に登り

遙望黄金台 遙かに黄金台を望む

丘陵盡喬木 丘陵 尽く喬木

昭王安在哉 昭王 安くに在りや

霸圖悵已矣 霸圖悵として已んぬるかな

驅馬復歸來 馬を驅りて復た歸り來たる

薊丘の南、いにしえの燕の碣石館の
跡に登り、遙かに黄金台の跡を眺め
やる。見渡すかぎり丘という丘は高
い木々に覆われ、いまや昭王の姿は、
どこにも見えない。悲しいことに、
昭王の天下制覇の夢はうたかたの如
く消えはてた。ただ寂しく、馬に鞭
当てて帰途につくだけ。



漢詩の歴史

盛唐 (712-765)

盛唐の約五〇年は。時間的には短い期間であったが、李白や杜甫、王維・孟浩然、高適・岑参など多くの優れた詩人が活躍して、中国の詩が最高潮に達した時期である。

政治の安定と経済の発展を基礎に唐王朝が国力が最も充実したこと、そしてその結果、学術・文化が著しく繁栄したことなどによる。

憶昔 杜甫 (抜粋)

憶昔開元全盛日

憶う昔 開元全盛の日

小邑猶藏萬家室

小邑猶お蔵す 万家の室

稻米流脂粟米白

稻米は脂を流し 粟米は白し

公私倉廩具豐美

公私の倉廩 俱に豊実

思い返せば、昔のあの開元の全盛の日々には、小さな県でも一万戸の家があった。作物もよくできて、コメはつややかにアワは白く、お上の蔵も個人の蔵も、みな穀物でふくれあがっていた。



漢詩の歴史

中 唐 (766-835)

安史の乱以降の様々な社会的矛盾が顕在化してきた中唐期には、「大曆十才子」と呼ばれる詩人たちが激動の社会から逃れるかのように田園生活や自然の情景を微細なタッチで描写した。憲宗の元和年間、「新楽府運動」＝社会的矛盾の告発と政治改革を求める詩人の行動。古代詩経の伝統に立ち返って「美刺」を明らかにし、漢代楽府の諷諭の精神を回復使用と主張した。

捕蝗 白居易（拔粹）

捕蝗捕蝗誰家子

蝗を捉え蝗を捕う 誰が家の子ぞ

天熱日長饑欲死

天熱く日長く飢えて死せんと欲す

興元兵久傷陰陽

興元 兵久しくして陰陽を傷い

和氣蠱蠹化為蝗

和氣蠱蠹されて 化して蝗と為る

せつせとイナゴとりに出しているのは、どこの誰だ。天候は暑く日は長く、腹を空かせて死にそうだ。興元の御世、長く続いた戦乱のために陰陽のバランスが崩れ、天地調和の気が虫害をこうむり、イナゴに変化して現れた。



漢詩の歴史

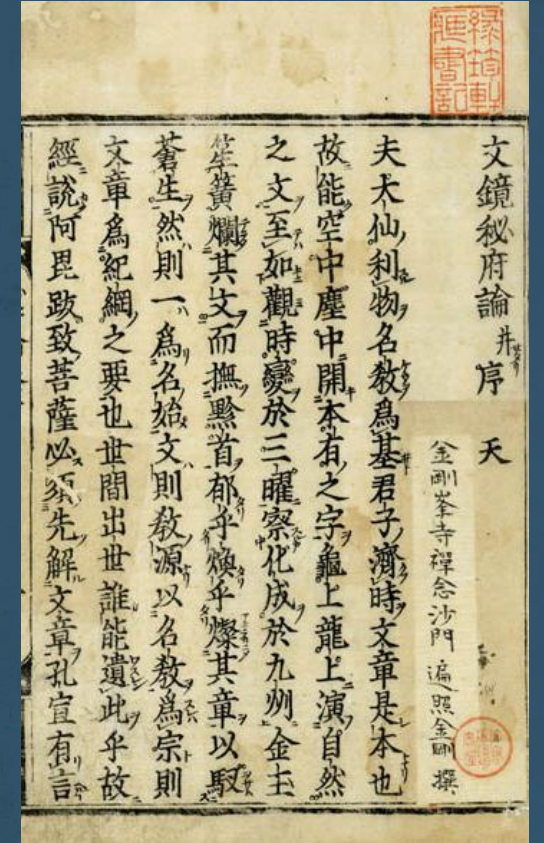
晩唐 (836-907)

王朝末期の弛緩した退廃的な空気を反映して、概して繊細な表現による耽美的な内容の作品が多い。詩の一般化と卑俗化はますます進展したものの、詩の活力が失われてきたのである。作詞層の拡大と詩の行き詰まりは、必然的に詩の批評と作詩の理論の発展をうながし、中唐から晩唐にかけて詩論が盛んに執筆された。⇒ほとんどはすでに失われてしまった。

文鏡秘府論

空海（774-835）著

唐に留学した時に集めた六朝から中唐までの詩文の創作理論と批評の一部が収められており、唐代の詩論を考察する上で貴重な文献となっている。



漢詩の歴史

北 宋

初期は高官たちが詩壇の中心を占め、耽美的な晩唐風の詩を作った。彼らが手本としたのは晩唐の李商隱の詩風であり、当時流行の詩のスタイルを、それらの代表作を集めた楊億の『西崑酬唱集』にちなんで「西崑体」と呼ぶ。

宋詩の改革は西崑体の批判から始まった。いたずらに華麗な言葉を羅列するばかりで内容の乏しい詩を排斥して、簡潔な言葉で現実的な内容を表現しようという主張であった。

南 宋

北の女真族の金に追われて一一二七年、宋王朝は南に移り、都を臨安府に定めて南宋が始まった。南宋の詩は江西派の詩風が広く全体を覆い、詩の日常化、一般化がますます進展した。

中に陸游や楊万里のように、基本的には江西派の流れの中にありながら、江西派の模倣主義や形式主義を乗り越えて、独自の詩境を開いた詩人も活躍した。

特に陸游は、南宋の屈辱的な状況を憂い北地の回復を訴えた愛国詩人として知られ、その詩は始めは江西派の詩を学び、後には積極的に唐詩を学ぶことに変わった。

漢詩の歴史

元

元の文学的特徴は「曲」と呼ばれる歌劇の流行にあったので、詩壇は相対的に低調であった。

明

明詩は、朝廷の高官たちや各地に出現した多くの詩社・詩派に属する人々が活躍したが、全体として見れば独創的な大作家に乏しい。

清

この時代は全体までに比べると学術が大いに進展し、各分野に碩学大儒と言われる人々が活躍した。学術的雰囲気は古典詩の研究方面に大きな影響を及ぼし、先人の詩の校訂・註釈・批評や、詩集の整理・出版、詩話・詩論の著述などが盛んに行われ、今日の古典的な中国詩学の基礎が作られた。



漢詩の構造

二

五言詩

七言詩

押韻

平仄

禁忌

例外



漢詩の構造

				一句字数	句数
詩	古体詩 (古体) (古詩)	[	四言詩	4	不定
			五言古詩 (五古)	5	不定
			七言古詩 (七古)	7	不定
			雜言古詩 (長短句)	不定	不定
	(律詩) (近体) (今体詩) 近体詩	絶句	五言絶句 (五絶)	5	4
			六言絶句 (六絶)	6	4
			七言絶句 (七絶)	7	4
		律詩	五言律詩 (五律)	5	8
			七言律詩 (七律)	7	8
		排律	五言排律	5	10以上
			七言排律	7	10以上

漢詩の構造

五言絶句

五字×四句

南中詠雁 韋承慶

萬裡人南去，三春雁北飛。
不知何歲月，得與爾同歸。

都を離れて、私は万里はるか南に行く途中、この春の季節、雁の群れは北を目指して飛び行く。いったいいつになったら、おまえたち雁の群れと一緒に都に帰れることだろう。

万里 人は南に去き
三春 雁は北に飛ぶ
知らず 何れの歲月ぞ
爾と共に帰るを得んや

南中に雁を詠ず





漢詩の構造

五言律詩

五字×八句

春夜喜雨 杜甫

好雨知時節，當春乃發生。 第一聯（首聯）

隨風潛入夜，潤物細無聲。 第二聯（頷聯）

野徑雲俱黑，江船火獨明。 第三聯（頸聯）

曉看紅濕處，花重錦官城。 第四聯（尾聯）

春夜雨を喜ぶ

好雨時節を知り
春に当たりて乃ち発生す
風に随ひて 潜かに夜に入り
物を潤して 細やかにして聲無し
野径 雲 俱に黒く
江船 火 独り明るし
曉に 紅の湿ふ處を看れば
花思からん 錦官城

素晴らしい雨は、降るべき時節を心得て降りだし、春のこのとき、生きとし生けるものすべての生長をうながしはじめた。雨は風に吹かれて、いつし夜の闇にしのびこみ、万物をしつとりと濡らしながら、音もなく降りそそぐ。野中の小道に出てみれば、雲もあたりのものもみな黒々としており、川に浮かぶ船の漁り火だけがあかあかと明るい。夜が明けて、あかい色が雨に濡れているところを見れば、きっと雨をうけて咲き出した花々が、枝もたわわに、錦官城には満ち溢れていることだろう。



漢詩の構造

七言絶句

七字×四句

金陵五題・烏衣巷 劉禹錫

朱雀橋邊野草花，烏衣巷口夕陽斜。
舊時王謝堂前燕，飛入尋常百姓家。

金陵五題・烏衣巷

朱雀橋邊 野草花さき

烏衣巷口 夕陽斜めなり

旧時 王謝堂前の燕

飛びて尋常百姓の家に入る

朱雀橋のほとりにには野草が花をつけ、烏衣巷の入り口には、夕陽が斜めにさしている、
むかし、豪族の王氏や謝氏の広間の前にいったツバメが、今では、ありふれた普通の民家に飛び込んでくる。

漢詩の構造

七言律詩

七字×八句

登高 杜甫

風急天高猿嘯哀，渚清沙白鳥飛回。第一聯（首聯）
無邊落木蕭蕭下，不盡長江滾滾來。第二聯（領聯）
萬裡悲秋常作客，百年多病獨登台。第三聯（頸聯）
艱難苦恨繁霜鬢，潦倒新停濁酒杯。第四聯（尾聯）

登高
風急に天高くして 猿嘯きて哀し
渚清く沙白くて 鳥飛び回る
無辺の落木 蕭々として下り
不尽の長江 滾滾として来る
万里 悲秋 常に客と作り
百年 多病 独り台に登る
艱難 苦だ恨む 繁霜の鬢
潦倒 新たに停む 濁酒の杯

秋風はげしく空は高く澄み、サル（猿）の鳴き声が悲しく響きわたる。岸辺の水は清らかに砂は白く、水鳥が飛び回っている。はてしなく広がる木々の葉が、風にサワサワと散り落ち、尽きることのない長江の水は、コンコンと次々に流れ去る。故郷を遠くはなれた悲しい秋に、私はいつも旅人の境遇、一生を病に苦しみつつ、ただひとり高台に登るのだ。苦勞をかさねて白くなった鬢の毛が、なんともうらめしい。病み衰えた私は、近ごろ酒杯を傾けることもやめてしまった。

漢詩の構造

(おういん)

押韻

漢詩では句の末尾に韻を踏む。

押韻（＝韻を踏む）とは、同じ音の響きを一定の位置に置くことであり、それによって耳に聞いて心地よいものにするのである。

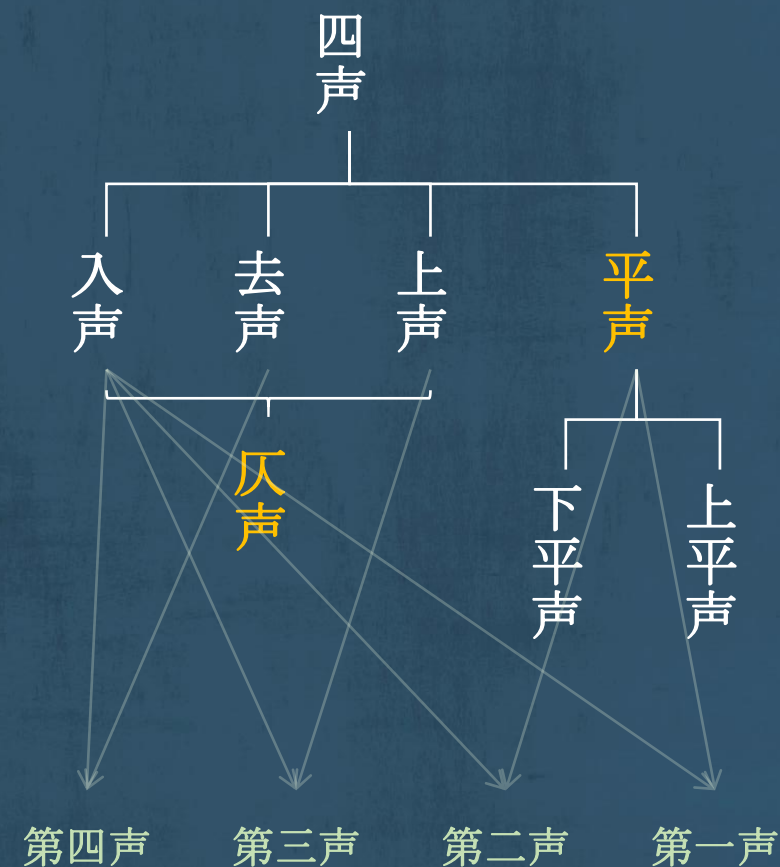
- 偶数句の句末で押韻する。
- 七言詩では第一句にも押韻する。
- 平声の韻目で押韻する。



同じ声調、同じ韻母の漢字群を韻目と呼ぶグループに分け、一〇六種類に整理してきた。

(ひょうそく)

平仄





漢詩の構造

上平声

東冬江支微魚虞齊佳灰真文元寒刪

下平声

先蕭肴豪歌麻陽庚青蒸尤覃鹽咸

上 声

董腫講紙尾語麌齊蟹賄軫吻阮旱潛銑篠巧皓哿馬養梗迥有寢感儉蹶

去 声

送宋絳寘未御遇霽泰卦隊震問願翰諫霰嘯效號箇禡漾敬徑宥泌勘豔陷

入 声

屋沃覺質物月曷黠屑陌錫職緝合葉洽

平水韻目表									
仄声					平声				
入声	去声	上声	入声	去声	下平声	上平声	入声	去声	上平声
屋 一	送 一	董 一	先 一	東 一	沃 二	冬 二	覺 三	江 三	支 三
沃 二	宋 二	腫 二	蕭 二	冬 二	覺 三	江 三	質 四	支 四	微 五
覺 三	絳 三	講 三	肴 三	江 三	物 五	微 五	月 六	魚 六	虞 七
質 四	寘 四	紙 四	豪 四	支 四	曷 七	虞 七	黠 八	齊 八	佳 九
物 五	未 五	尾 五	歌 五	微 五	屑 九	佳 九	藥 十	灰 十	真 十
月 六	御 六	語 六	麻 六	魚 六	陌 十	真 十	錫 十一	文 十一	元 十一
曷 七	遇 七	麌 七	陽 七	虞 七	職 十一	文 十一	緝 十二	寒 十二	刪 十二
黠 八	霽 八	齊 八	庚 八	齊 八	合 十三	刪 十二	葉 十四	洽 十三	
屑 九	泰 九	蟹 九	青 九	佳 九					
藥 十	卦 十	賄 十	蒸 十	灰 十					
陌 十一	隊 十一	軫 十一	尤 十一	真 十一					
錫 十二	震 十二	吻 十二	侵 十二	文 十二					
職 十三	問 十三	阮 十三	覃 十三	元 十三					
緝 十四	願 十四	旱 十四	塩 十四	寒 十四					
合 十五	翰 十五	潛 十五	咸 十五	刪 十五					
葉 十六	諫 十六	銑 十六							
洽 十七	霰 十七	篠 十七							
	嘯 十八	巧 十八							
	效 十九	皓 十九							
	号 二十	哿 二十							
	箇 二十一	馬 二十一							
	禡 二十二	養 二十二							
	漾 二十三	梗 二十三							
	敬 二十四	迥 二十四							
	徑 二十五	有 二十五							
	宥 二十六	寢 二十六							
	沁 二十七	感 二十七							
	勘 二十八	談 二十八							
	豔 二十九	蹶 二十九							
	陷 三十								



漢詩の構造

聲律啟蒙

清·車萬育 著

一 東

雲對雨，雪對風。晚照對晴空。來鴻對去燕，宿鳥對鳴蟲。

三尺劍，六鈞弓。嶺北對江東。人間清暑殿，天上廣寒宮。

兩岸曉煙楊柳綠，一園春雨杏花紅。

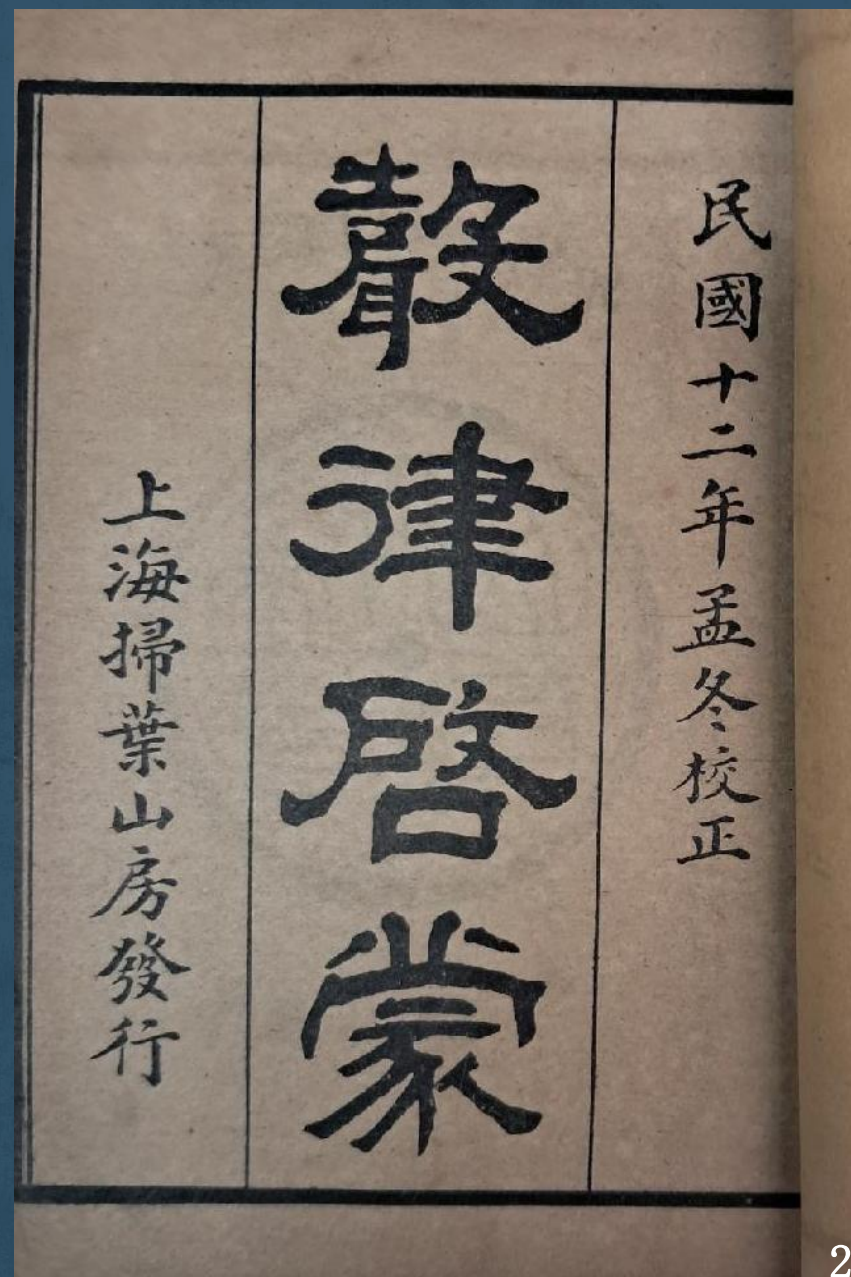
兩鬢風霜，途次早行之客；一蓑煙雨，溪邊晚釣之翁。

沿對革，異對同。白吏對黃童。江風對海霧，牧子對漁翁。

顏巷陋，阮途窮。冀北對遼東。池中濯足水，門外打頭風。

梁帝講經同泰寺，漢皇置酒未央宮。

塵慮縈心，懶撫七弦綠綺；霜華滿鬢，羞看百煉青銅。

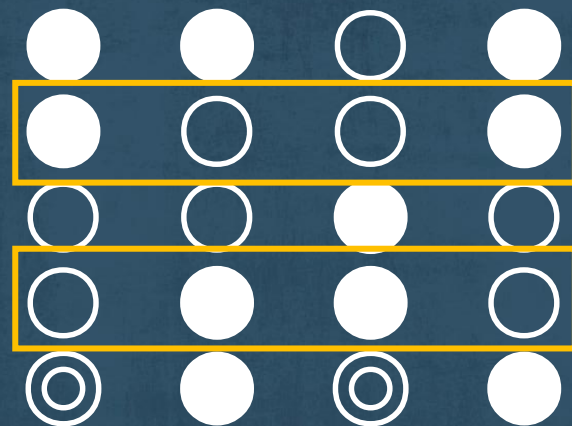


漢詩の構造



南中に雁を詠ず
万里 人は南に去き
三春 雁は北に飛ぶ
知らず 何れの歳月ぞ
爾と同一に帰るを得んや

萬裡人南去，
三春雁北飛。
不知何歲月，
得與爾同歸。



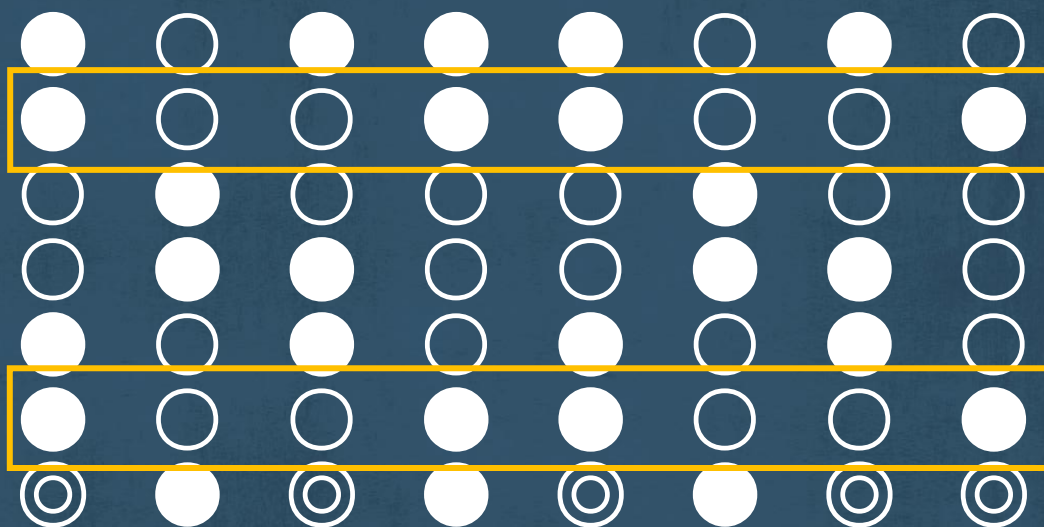
南中詠雁

韋承慶

二四不同
(五言)

漢詩の構造

風急天高猿嘯哀，
 渚清沙白鳥飛回。
 無邊落木蕭蕭下，
 不盡長江滾滾來。
 萬裡悲秋常作客，
 百年多病獨登台。
 艱難苦恨繁霜鬢，
 潦倒新停濁酒杯。



登高

杜甫



登高

風急に天高くして 猿嘯きて哀し
 渚清く沙白くて 鳥飛び回る
 無辺の落木 蕭々として下り
 不尽の長江 滾滾として来る
 万里 悲秋 常に客と作り
 百年 多病 独り台に登る
 艱難 苦だ恨む 繁霜の鬢
 潦倒 新たに停む 濁酒の杯

二六對
(七言)



漢詩の構造

禁忌事項：下三連・孤平・同字相犯・冒韻



下三連

下三字を<○○○>=すべて平声あるいは<●●●>=すべて仄声としてはいけない。



孤平

五言句の二文字目・七言句の四文字目が平声の場合、その前後を仄声にして<●○●>としてはいけない。



同字相犯

一首の中で同じ字を二回使ってはいけない。

- ・重言：悠悠（例外として可）
- ・句中対：煙籠寒水月籠沙（例外として可）



冒韻

押韻箇所以外に、その押韻の韻目に属する字を使ってはいけない。

- ・絶句の後半（第三句・第四句）では許容される場合がある。



漢詩の構造

例外規則：通韻・挟み平

通韻

押韻の際に発音の似通った二種類の韻目（AとB）を用いてもよい。
その場合、＜第一句—第二句—第四句＞を＜A—B—B＞の形で押
韻し、偶数句末は必ず同一韻目にする。

挟み平

韻を踏まない句の下三字を＜●○●＞の平仄配置にして、
＜○●●＞の代用としてもよい。



漢詩のコツ

三

詩語

動詞

形容詞・副詞

修飾語

前置詞

助動詞

有無

特殊構文

漢詩のコツ

1. 和習を避ける・詩語を用いる

いわゆる「和習」

- ・単語レベル：新たに日本で作られた漢語（和製漢語）
- ・用法レベル：日本独自の訓（和訓）や用法（国用）
- ・用字レベル：日本で独自に作られた漢字（国字）

詩語

天空

- ・杳冥 ヨウメイ 遠い空 ・空冥 クウメイ 大空
- ・江天 コウテン 川の上の大空
- ・九穹 キュウキュウ 九天。天の最も高いところ

石川忠久監修『漢詩創作のための詩語集』（大修館書店、2022年）



漢詩のコツ

2. 動詞の用法

①動詞+目的語 飲酒＝酒を飲む

②動詞+場所・対象 登山＝山に登る

③動詞+起点 起床＝床より起く

④動詞+発言や思考の内容 云好＝好しと云う

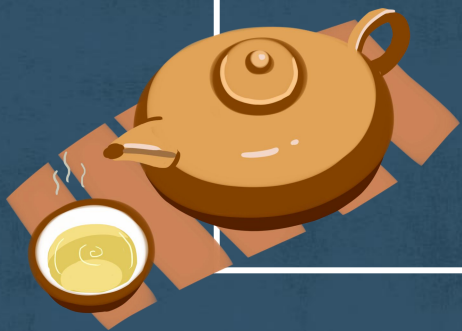
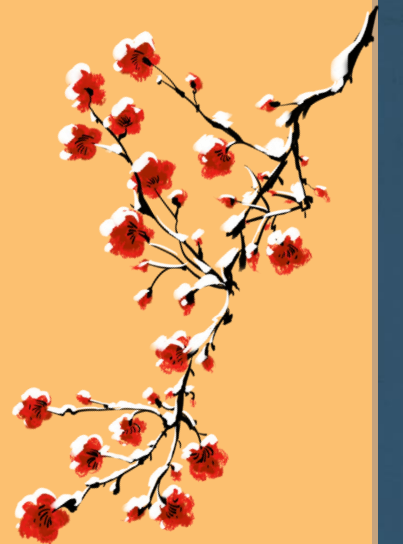
⑤動詞+変化後の形 為人＝人と為り

⑥動詞A+目的語B+場所・対象C

飲酒山上＝酒を山上に飲む (BをCにAす)

⑦動詞A+目的語B (人) +目的語C (物)

与我錢＝我に錢を与えよう (BにCをAす)





漢詩のコツ

3. 形容詞や副詞の用法・認定文・否定文

- ①主語+形容詞 水青＝水青し
- ②動詞+形容詞 飲酒多＝酒を飲むこと多し
- ③副詞+動詞 多飲酒＝多く酒を飲む
- ④主語A+是+名詞B 日日是好日＝日々是れ好日なり

(一日一日が良い日である)

- ⑤不+動詞 不知＝知らず
- ⑥不+形容詞 不樂＝楽しからず
- ⑦不是+名詞 不是雪＝是れ雪ならず
- ⑧非+名詞 非詩＝詩にあらず



漢詩のコツ

4. 修飾語・動詞の連続・数量語

①形容詞+名詞 美女＝美しい女

②名詞+名詞 夜月＝夜の月

③動詞A+動詞B AしてBす

謀反＝謀りて反く（計画して主君に背く）

④動詞A+動詞B BするをAす

謀反＝反くを謀る（主君に背くことを計画する）

⑤動詞+数量 …すること～（なり）

行千里＝行くこと千里なり

⑥形容詞+数量 …なること～（なり）

長一尺＝長きこと/長さ一尺





漢詩のコツ

5. 前置詞の用法

①＜於+場所＞+動詞 …に於いて～ 於山水遊＝山水に於て遊ぶ

②動詞+＜於+名詞＞ …に～ 遊於山水＝山水に遊ぶ

③動詞+＜於+名詞＞ …に～す（場所） 伝於世＝世に伝わる

④動詞+＜於+名詞＞ …より～す（起点） 出於口＝口より出ず

⑤動詞+＜於+名詞＞ …に～せらる（受身） 制於人＝人に制せらる

⑥形容詞+＜於+名詞＞ …よりも～なり（比較） 青於藍＝藍よりも青し

⑦＜以+名詞＞+動詞 …を以て～す（何かを/何かで/何らかの理由で）

以心伝心＝心を以て心に伝う

⑧＜自+名詞＞+動詞 …より～す 自郷山来＝郷山より来たる

⑨＜与+名詞＞+動詞/形容詞 …と～す/なり 与朋看＝朋と見る 与世人疎＝世人と疎し 34





漢詩のコツ

6. 助動詞の用法（1）

①使役 ～させる 「使/令/教/遣」+名詞+動詞 …をして～せしむ

使人驚＝人をして驚かしむ

②受身 ～される 「被/見」+名詞+動詞 …に～せらる

被人知＝人に知らる

③将然 ～しようとする 将+動詞＝将に～せんとす 欲+動詞＝～せんと欲す

君将去＝君将に去らんとす

④当然・必要 ～すべきだ・～する必要がある

当+動詞＝当に～すべし 応+動詞＝応に～すべし

宜+動詞＝宜しく～すべし 須+動詞＝須く～すべし

君当醉＝君当に酔うべし



漢詩のコツ

6. 助動詞の用法（2）

⑤可能 ～できる 可+動詞＝～すべし 能+動詞＝能く～す

猶可見＝猶お見るべし

⑥当然 ～すべきだ

汝可往＝汝往くべし

⑦相応・価値 ～するにふさわしい・～する価値がある

花可愛＝花愛すべし

⑧推量 ～だろう（当・応を用いてもよい）

必可独不死＝必ず独り死せざるべし





漢詩のコツ

7. 「有」「無」字の用法

- ① 「有」+物・人 ～有り（何々がある・いる）

山中有春草＝山中に春草有り

- ② 「在」+場所 ～に在り（どこそこにある・いる）

春草在山中＝春草 山中に在り

- ③ 「不在」+場所 ～に在らず（どこそこにない・いない）

- ④ 「有」+物・人+動詞 …有り～す/…の～する有り

有人帰＝人の帰る有り

- ⑤ 「無」+物・人+動詞 …として～する無し/…の～する無し

無客到＝客の到る無し



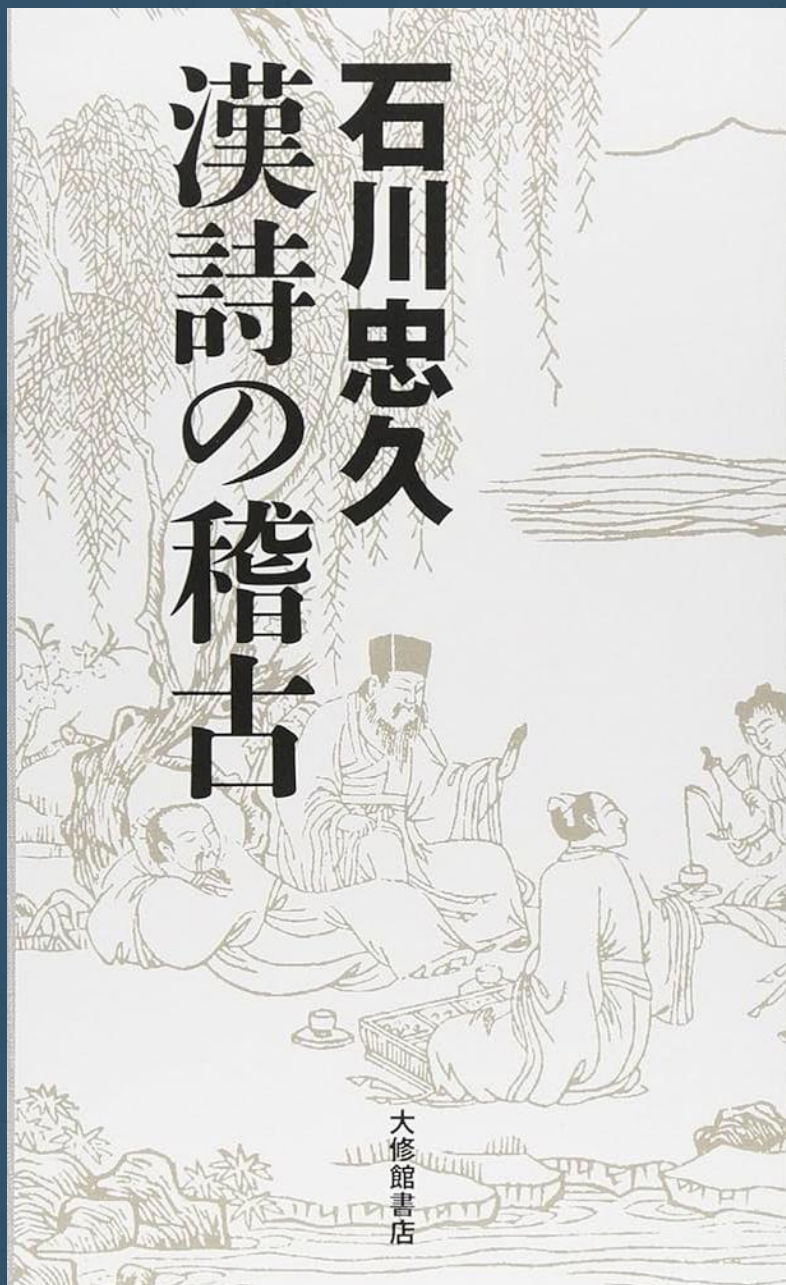


漢詩のコツ

8. 現存文・その他の特殊構文

- ①主語が動詞の後 開花＝花開く
- ②主語が動詞の前 花開＝花開く
- ③疑問詞が動詞の後 求何＝何をか求めん
- ④疑問詞が動詞の前 何求＝何をか求めん
- ⑤「知」＋疑問詞文 知んぬ…ぞ
 知何時＝知んぬ何れの時ぞ
- ⑥「不知」＋疑問詞文 知らず…ぞ
 不知何時＝知らず何れの時ぞ





石川忠久『漢詩の稽古』（大修館書店、二〇一五年）

感謝清聽

